



この一冊

Vol. 109



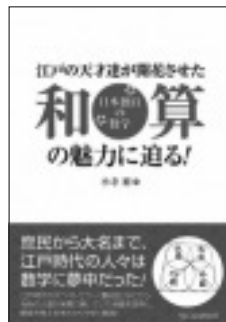
当会会員 ● 宮田 義晃 (61期) ● Yoshiaki Miyata

小学生のころに好きだった科目(体育、音楽、図工は除く)は算数と社会だった。良くも悪くも小学校生活後半は中学受験に向かっていったこともあり、社会に関して言えば、日本の山や川の名前、地方都市の名産品や産業などの知識をせっせと貯め込んでいった結果、今も出張のついでにマニアックな史跡に立ち寄ったり、依頼者らとの地方話が盛り上がったりという形で、自分の中に残っているものが感じられている。

一方、算数はどうかと振り返ると、確かに中学以降も数学には興味をもって取り組んだし、大学受験期にはx軸とy軸とz軸の中を立体がグルグル回転する様子を脳内CGに投影してワクワクしたりしていた不気味な(?)記憶はある。そして、数学が好きなのに社会が好き、理科が嫌いな「理数系」ならぬ「文数系」だったということで経済学部に進学し、大学でも数理経済学に親しんでいた記憶もある。

ところが、その後約20年、すっかり算数・数学とはご無沙汰となり、気付けば「ちょっと苦手」になってしまっていた。大量の計算書類を読まなければいけないとなるとだいぶ心が重くなるし、知財や医療、建築関係の打ち合わせ

『江戸の天才達が 開花させた 和算の魅力に迫る!』



小寺 裕 著
C&R研究所
1,728円(税込)

では、あらかじめ「我々も文系の人間ですから…」なんて予防線を張ってしまっている。「そんな自分じゃなかったはず…」と思いながら数年が経ち、我が子にもそろそろ算数を教えなきゃいけないし、ということで読み始めたのが「和算」の本である。

本書によると、江戸時代初期に登場した吉田光由(1598~1672)による『塵劫記』が本格的な和算の誕生であり、その後、著名な関孝和(1642~1708)による「関流」など、様々な流派が生まれたとのこと。

まずは懐かしの鶴亀算から。「ここに鶴亀合わせて百頭あり。只云足和して二百七十二。鶴亀各に何ほどと問。」覚え

てる、こんなトラックみたいなを書いて…ほら解けた。

次は盗人算(過不足算)。「盗人が橋の下で布を分配している。1人に7反ずつ分配すれば6反余り、8反ずつ分配すれば9反不足する、ということ橋の上で聞いた。盗人の数および反数はいくらか。」方程式じゃなくてこういう四角を書いて…よし解けた。少しずつ長年眠っていた算数脳が目覚めてきた!

このあたりをウォーミングアップとして、本書は、和算流の「二次方程式」「余弦定理」「正弦定理」「ヘロンの公式」と数学編でどんどんレベルを上げていく。ついていけなくなりつつも、中高生当時は考えもしなかった和風の解法に数学脳というよりはむしろ知的好奇心が刺激されていく感覚。

読了して、自分の「文数系」が何割かは覚醒した気が、一応している。でもまだ「私は文系だけど、数的思考は得意なので…」なんて大風呂敷を広げるのは無理。勉強は続けていかねば。

私と似たような人生を歩んでこられた方、少なからずいるはず。つい、上の問題を図を書いて解いてしまった人、「和算」で何かを変えるきっかけにしてみてもいい。 ■